

平成 2 6 年 6 月 1 0 日現在

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320096

研究課題名（和文）地域社会により順応するための「気づかれない方言」教材の作成とその方法論の構築

研究課題名（英文）Developing a methodology for making learning materials to study the listening-comfortable language in order to accommodate to a local society

研究代表者

馬場 良二（BABA, RYOJI）

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：30218672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,400,000 円、（間接経費） 2,820,000 円

研究成果の概要（和文）：日本社会で初対面の相手とコミュニケーションをとるとき、多くの場合は共通語を使う。ただ、この共通語は学習者が教室で学ぶ日本語とは幾分ことなり、その地域の方言の影響を受けた「心地よい共通語」である。「心地よい共通語」は、「やわらかい方言」と「気づかれない方言」とを特徴とする。「やわらか方言」とは、デス・マス体の会話の中でも使われる方言語句であり、「気づかれない方言」とは、共通語の形をしていて使い方が方言独特のもの、そして、その方言に特有の談話の流れである。

日本語学習者が、よりスムーズに地域社会に順応できるように教材を作成し、その方法論を構築した。

研究成果の概要（英文）： We usually speak Standard Japanese, when we communicate with a person whom we meet for the first time. But the standard Japanese with which we communicate in the local society is a little different from the Japanese which learners study in their classrooms. The local Standard is what we might call a listening-comfortable language subject to the influence of the local dialect. The listening-comfortable language characteristically includes the Soft Dialect and the Unknown Dialect. The former is the dialectal words and phrases sometimes used in formal conversations. And the latter is the linguistic elements with the same forms as Standard Japanese but with the different usages and the discourse patterns peculiar to the dialect.

We made learning materials for the foreigners as citizens to study the listening-comfortable language in order to accommodate themselves to the local society. We also draw some conclusions regarding methodology for developing such materials.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：気づかれない方言 やわらかい方言 日本語教育 教材作成 地域社会 熊本方言

1. 研究開始当初の背景

生活者として日本に滞在する外国人の数は増え続けており、居住する地域の人々との関わりも増えている。日本社会で人間関係を構築しようとするデリケートな局面では、共通語を使うが、地域で話されている共通語には地域語である方言の要素が含まれるものが少なくない。

高木(2002)は山形県で生活する日本語学習者が日常生活でふれるであろう日本語について調査を行っているが、特に、丁寧にものを頼む時など、共通語形式の中に方言形式が見られるという。このような傾向は熊本方言にも見られる。熊本では事情の説明の際に、「子どもが急に熱を出したケンガデスネ」という言い方をする。「ケンガ」は、デス・マス体にもあらわれる「やわらかい方言」で、聞き手の共感を得ることができる。また、頼み事や許可を得る場合の話の切り出しの部分には「アノデスネ」が多用される。フィラーによって、丁寧な態度であることを示すことができる実用的な表現であり、熊本方言話者はこれを方言だと思っていない。職場や学校のPTAといった場面や、地域のお年寄りや配偶者の両親との会話など、親しみを込めつつ丁寧さも表現する必要がある場合、このような方言を含む表現が多用される。

しかし、外国人にとっては、方言も若者ことばもスラングも、全て習ったことのないことばであり、何が方言で何が若者ことばなのか区別がつかない。方言なら、デス・マスをつけることで、やや改まった場面でも使うことができるが、若者ことばはこれができない。

このような状況の中で、外国人のための方言教材作成の必要性を感じ、本研究グループは平成18-20年度科研の助成を受け、留学生のための熊本方言初級教材『話してみらんね さしより!熊本弁』を作成した。これは熊本市在住の外国人留学生が対象で、友人、先輩、アルバイト先の同僚、上司との会話といった大学生活の基盤となる人間関係を構築するための日本語力の養成を目指し、質問する、誘う・断る、許可をもらうなどの「機能」ごとに単元を設定した方言教材である。

これに続く、中上級教材の作成を目指したのが、本研究の目的である。熊本市内でかわされている自然な発話の実態を録音、書き起こしてデータベース化し、そこから方言要素を抽出し、教材化するという手法で教材作成を行うこととした。

○高木祐子(2002)『定住外国人を対象とした“地域共通語”教材開発に関する研究』科学研究費補助金研究成果報告書

2. 研究の目的

日本語で社会との関わりが持てるようになった中上級レベルの学習者は、地域社会の中で方言を含む様々な日本語に遭遇する。本研究は、地方在住の日本語学習者がその地域

社会により順応できるようにするための方言教材の作成とその方法論の構築を目的としている。

初級学習者に比べ、中上級学習者はより多様な地域方言に接することが予測される。このため、中上級の方言教材は日本語学習者が耳にした方言形式を検索し、その意味や、文例を調べることでできるデータベース型の教材を目指した。

日本語学習者が遭遇する地域の日本語には、主に共通語とは異なる形式をもつ方言形式で構成される「ごく親しい」レベルの会話の他、方言形式を多用しながら、文末はデス・マスを使う「やや改まった」レベルの会話がある。「ごく親しい」会話は家族や友人の間で使われ、「やや改まった」会話は職場、アルバイト先、近隣の住民、配偶者の親族との会話の中で使われる。また、共通語と同じ形式をとりながら使い方が共通語とは異なり、その地域特有の特徴を持つ「気づかれない方言」もある。

本研究では、共通語と異なる形の方言形式に加え、共通語と形は同じでも用法の異なる表現をすべて「地域語」としてとらえ、これらを教材としてまとめるためのプロセスを、方言教材作成の方法論として提示することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 家族や友人という親しい間柄で交わされる自然談話の収集

「ごく親しい」レベルの会話をデータ化するため、次のような方法で談話を収集した。

調査協力者：熊本方言話者にICレコーダーを渡し、録音を依頼。1回30分程度の自由

会話を数回分録音してもらう。

録音データの中から状態の良いもの、方言要素が多用されているものを選び文字化。

*録音協力者は19~74歳の女性34名、男性16名(主に熊本市及びその周辺地域生育、以下の協力者も同様)。文字化した音声データの総時間数は13時間。

2) ロールプレイ談話の収集

調査協力者：熊本方言話者および、東京方言話者にロールプレイを行ってもらい、これを録音。

*調査協力者は7組14名(19~49歳の女性10名、男性4名)の熊本方言話者と5組、10名の東京方言話者(20~60歳)。

*ロールプレイの場面は、同僚や、先輩・後輩等の職場の親しい人と「依頼」「確認」「伝言」等を行う場面、知らない人に「質問」「確認」を行う場面等を設定。

*ロールプレイでは、共通語形式によって会話が進行していくことを想定して場面設定を行った。見かけ上は共通語形式と変わりのない談話から、方言的特徴を抽出することが、ロールプレイ談話収録の目的である。

録音した音声を文字化し、談話分析を行う。

3) タグ付け

文字化したデータには発話番号をふり、データベース作成のためのタグをつけた。タグをつけた項目とこれに対応するタグの例を以下にあげる。設定したタグはデータベース型教材の検索項目として使用することができる。

方言要素とタグの例：

ト : 文末表現 end

例) どこ行くト(の)

バ : 助詞 case

例) ライトバ(を) 上向きにする

チット : 音変化 son

例) ま、チット(ちょっと) 込むけど

ルル : 動詞の活用 ver/ jug

例) 言わルル(言われる)

形容詞+力: 力語尾 ka

例) 寒力(寒い)

4) 方言要素の選定

タグ付け作業の前に、どのような項目にどのようなタグをつけるのか、つまり、この教材では何を熊本方言として取り扱うのかについて確認した。項目は秋山(1983『熊本県の方言』『講座方言学 9 -九州地方の方言-』, 国書刊行, pp207-223)にまとめられている熊本方言の表現を参考にしながら選定した。また、秋山(1983)のリストにないものや、近年、若年層でよく使われている表現についてもタグを設定した。これには、「行力ナン(=行かなければならない)」のように文型として捉えられるものや、「着ラレテクダサイ(着てくださいの尊敬表現)」がある。

5) タグ付けした文字化資料を検索する検索システムを作り、web 上で検索できるように設定した。この検索エンジンを含むデータベースを中上級用熊本方言教材とする。

1) ~ 5) の方法で作成した教材を本研究の「話してみよう! 熊本弁」プロジェクト」のサイトで公開する。また、教材作成にあたって、録音方法や方言要素選定の基準、タグ付け方法、タグ付けした文字化資料のサンプルなどについても公開し、方言教材作成のための方法論として示す予定である。

4. 研究成果

中上級用熊本方言教材: 「話してみらんね なんさん! 熊本弁」(2014 年 8 月ごろまでに公開予定)

日本社会で初対面の相手とコミュニケーションをとるとき、多くの場合は共通語をつかう。ただ、この共通語は学習者が教室で学ぶ日本語とは異なり、その地域の方言の影響を受けた「心地よい共通語」である。「心地よい共通語」は、「やわらかい方言」と「気

付されない方言」とを特徴とする。「やわらかい方言」とは、デス・マス体の会話の中でも使われる方言語句であり、「気付かれない方言」とは、共通語の形をしていて使い方が方言特有のものである。それらを抽出し、教室で学んだ日本語にプラスすることによって、地域の日本人が心地よく感じる共通語を効率的に身につけることのできる中上級用教材として、「話してみらんね なんさん! 熊本弁」を作成した。

本教材の使い方

本教材はトップページの「調べたい言葉」で検索し、実際の談話例を抽出することができる。例えば、熊本方言の語尾によく見られる「タイ」を「調べたい言葉」にカタカナで書き込み、検索ボタン(画面では「おくる」)をクリックすると、「タイ」を使用した実際の談話例が表示される。「種類」では、文法項目による検索ができるようになっている。「文末表現」で検索すれば、熊本方言において特徴的な「タイ」や「ト」「ド」などが抽出される。複数の文法機能を持つ方言であれば、「文末表現」+「タイ」と And 検索を行う事ができ、的確な談話例を抽出することができる。方言を耳にした学習者が、音を頼りに検索することができるシステムである。またどんな方言要素があるのか調べたい人のために方言要素一覧を公開した。トップページの「例文」のアイコンをクリックすると、方言要素一覧が表示される。この表では熊本方言の例文に、共通語の訳をつけている。一覧表を見ながら自分が調べたい言葉、またその文法的役割などを理解する事ができ、検索画面で検索すれば、さらに多くの使用例を見ることができる。

この方言要素一覧には、共通語と異なる形式の方言要素だけでなく、共通語形式と検索結果に表示される使用例は自然談話データとして収録されたものの他、ロールプレイ談話データも含まれている。データ数は 2733 ターン分の発話データである。1 ターンは会話において、発話交替が行われる単位で、1 ターンの中には複数の文が含まれる。

(本教材の URL :

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~iimulab/dialect/sasiyori/>)

参考資料

- ・自然談話資料：話者情報、録音方法
- ・方言要素一覧
- ・タグ付けマニュアル
- ・ロールプレイ談話資料：話者情報、ロールカード

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

和田礼子

「西日本方言話者と東京方言話者の共通語使用場面におけるアスペクト認識 - 同時進行ナガラ節、テルトコ形のアスペクトについて - 」

『鹿児島大学留学生センター紀要』第 1 号
2013、1-16

吉里さち子

「熊本市内方言話者の昔話談話におけるコード・スイッチングアスペクト表現に注目して」

鹿屋体育大学外国語教育センター研究報告
『言語と文化』第 9 巻
2012、41-49

吉里さち子

「熊本市内方言におけるコードスイッチング-特にアスペクト表現について」

『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第 6 号、2013、75-85

〔学会発表〕(計 1 件)

和田礼子・田川恭識・嵐洋子・島本智美・吉里さち子・大山浩美・黒木邦彦・甲斐朋子・大庭理恵子

「『地域社会により順応するための方言教材』の開発」

日本語教育国際研究大会

2012 年 8 月 18 日

名古屋大学

吉里さち子・嵐洋子・大庭理恵子・大山浩美・甲斐朋子・田川恭識・馬場良二

「『地域社会により順応するための方言教材』の開発：教材開発のプロセスとロールプレイ談話の結果を中心に」

日本語教育方法研究会

2013 年 9 月 21 日

立命館アジア太平洋大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

中上級用熊本方言教材：「話してみらんねなんさん！熊本弁」(2014 年 8 月ごろまでに公開予定)

6. 研究組織

(1)研究代表者

馬場 良二(熊本県立大学・文学部・教授)

研究者番号：30218672

(2)研究分担者

和田 礼子(鹿児島大学・学内共同利用施設等・准教授)

研究者番号：10336349

大山 浩美(奈良先端科学技術大学院大学・教養学部・研究員)

研究者番号：00590126

大庭 理恵子(熊本県立大学・文学部・講師)

研究者番号：80618009

吉里 さち子(立命館アジア太平洋大学・公立大学の部局等・講師)

研究者番号：20544448

嵐 洋子(杏林大学・外国語学部・准教授)

研究者番号：90407065

(3)連携研究者

島本 智美(崇城大学・留学生センター・講師)

田川 恭識(早稲田大学・日本語教育研究センター)

黒木 邦彦(韓国啓明大・語文大学・助教授)

研究者番号：80613380